



2024年度 須磨学園中学校入学試験

国 語

第 2 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、
受験番号シールを貼^はり、受験番号と名前を記入しなさい。

- すべての問題を解答しなさい。
- 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 解答は、1 行の枠内に 2 行以上書いてはいけません。また、字数制限のある問題については、記号や句読点も 1 字と数えることとします。
- 試験終^{しゅうりょう}了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

須磨学園中学校

※この冊子は再生紙・ベジタブルインキを使用しています。

【一】 次の文章は、島田誠『『居場所』ということ』の一節です。筆者は、神戸北野で画廊「ギャラリー島田」を営んでいます。これを読んで、後の設問に答えなさい。なお、本文の改行・空白に関しては、原文のままとしました。

「居場所」ということ 画廊を三〇年続けてきた意味が、ようやく分かってきました。 重松あゆみさんが「三〇年目の透視図」に「人の居場所とは何だろう。心や精神のすみかはどこだろう。時間が流れ、風景が変わっていくことだけは不変なのだろう。時間と書かれています。 私がやりたいことは「作家の居場所」「作品の居場所」を探すことだと思いたったのです。 作家にとって、良く売れる画廊、いいお客をもっている画廊があるがたいのは当然です。しかし、ギャラリー島田は販売力が欠けていて、それを期待する作家は失望して去って行きます。私が見ているのは作家の背骨。創作に向かうシセイです。そこに信頼がなければ、多少スランプがあっても、結局いい仕事につながっていきま

す。そして「待てばカイロの日和あり」とギャラリー島田を「居場所」として付き合ってくれる作家には、本当に日和があるのです。「人生の通奏低音」作家と向かい合う。長い時間の流れのなかでお互いが成長していく。そこでは真剣勝負です。随分と厳しいことを言ってきました。そこを乗り越えての信頼なのです。

作家は孤独なものです。何のために、誰のために描いているのか、何者なのか？ というコンゲンテキな問いかけを忘れてしまった作家、ソシキの中や、社会的評価に安住しようとする作家にはまったく興味が持てません。 創造に命をかけて向かいあう孤独な営為に共感をし、評価し、力になりたいと思っています。私の人生の通奏低音と化してしまった、ゴッホがテオに宛てて書き投函されなかった最後の手紙の一節。 死んだ芸術家の絵を扱う画廊と生存中の芸術家の絵を扱う画廊とのあいだになぜこんな理不尽な違いがあるのか。だが、ともかく、ぼくの絵、そのためにぼくは自分の生命をキケンにさらし、理性までナカバ壊れてしまった——それでもいい——だが、きみはぼくが知るかぎり、そんじょそこの画廊とは違う。いまでもきみは自分の信念を曲げず、人間性を失わずに生きていけるとぼくは思う。だが、きみは何を望んでいるのか？ 結局、フィンセントにはテオしか「居場所」がなかった。テオの結婚でその居場所も失われようとしていた。それは希望を失うことであつた。 ギャラリー島田が真剣に生きる作家の、重松さんの言葉にある「心や精神のすみか」としての「居場所」と思っていただけばうれしい。その作家が生きていくための糧を得る「居住地」は別であつてもいいのです。

「作品の居場所」 評価の定まった作家やブッコ作家の作品が、とんでもない価格で売買されるのを見ると、それが市場というも

のだと分かっている、気分が引けてしまっています。そこで大儲けをすれば「お金は淋しがり屋」だから雪だるまで集まってくるのかもしれないませんが、そのことで大切なことが見えなくなるのを恐れます。 作家が作品を誰かに、どこかに手渡していく。それを媒介するのが私たちの仕事です。「私にとって、かけがえのない作品です」と大切にしていただけの方へ渡れば、その作品は居場所をえる。でもビジネスと割り切れれば作品は「放浪」の旅に出る。作家の大作を美術館や公的な場所に寄贈・寄贈仲介を続けているのも「作品の居場所」を探しているともいえます。

注1 重松あゆみ：陶芸作家（一九五八）。注2 三〇年目の透視図：ギャラリー島田の開業三〇周年記念誌。

注3 ゴッホ：フィンセント・ファン・ゴッホ（一八五三～一八九〇）。オランダの画家。

注4 テオ：テオドルス・ファン・ゴッホ（一八五七～一八九二）。画廊。フィンセント・ファン・ゴッホの実の弟。

一 設問

問一 〓線部 i「れ」、ii「の」と最も近い意味・用法で用

いられている文を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、
番号で答えなさい。

i 書かれています

- 1 道の上にいた虫は鳥に食われてしまった。
- 2 校長先生は「あいさつが大事」と話された。
- 3 昔のことがありありと思い出される。
- 4 仕事がおわたつたので、ようやく眠れる。

ii 見ているのは

- 1 「甘いのがいい」と妹は言った。
- 2 それはあなたの感想ですね。
- 3 母のつくったカレーを食べたい。
- 4 彼が部長の田中です。

問二 「信頼」(――線部 A)とありますが、それはどういうも

のですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ

選び、番号で答えなさい。

- 1 画廊に販売力がないことも、自分が陥っているスランプも
気にしない大胆な作家を信じる気持ち。
- 2 画商が出す無理難題を乗り越え、自身の成長へとつなげる
力のある作家を信じる気持ち。
- 3 孤独な創作活動を苦にせず、寡黙に取り組む、まだ世に出
ていない作家の才能を信じる気持ち。
- 4 創作の目的を自問しながら懸命に活動をし、厳しい指摘に
も創作の軸がぶれない作家を信じる気持ち。

問三 「作家は孤独なものです」(――線部 B)とありますが、

なぜそう言えるのですか。その理由の説明として最も適当な
ものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 作家とは、作品が売れるか否かにかかわらず、自身の描き
たいものを追い求めて制作を行い、他者から良い評価を得よ
うとは思わないものだから。
- 2 作家とは、自分の描きたい絵を描くことを追い求めるあま
り、自分の理性や生命をも犠牲にするため、一般的な社会か
ら理解されないものだから。
- 3 作家とは、自分の作品をいいお客に売ってくれる画商を求
め、意見のあわない画廊とは仕事をしないため、交際の幅が
狭くなるものだから。
- 4 作家とは、画廊の主人との真剣なやりとりの中で受けた厳
しい指摘を乗り越えるため、人生のほとんどを創作に費や
し、他者との交流を拒むものだから。

問四 「手紙の一節」(――線部 C)とは、「死んだ芸術家」か

らどこまでを指しますか。該当する箇所、終わりの三字を
本文から抜き出さない。ただし、句読点や記号は一字とし
て数えます。

問五 「フィンセントにはテオしか『居場所』がなかった」(――

- ―線部 D)についての説明として最も適当なものを次の中か
ら一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 フィンセントは、テオは生存中の芸術家と死んだ芸術家を
区別しない人物であり、自分のことを格別に思いやつてくれ
る人物だと考えていること。
 - 2 フィンセントは、テオは自分にとって唯一無二の存在であ
り、いつでも家族の中で一番身近にいてくれる人物だと考え
ていること。
 - 3 フィンセントは、テオは一般的な画商よりも頑固な一面を
持っているが、画商として理不尽な差別をしない尊敬できる
人物だと考えていること。
 - 4 フィンセントは、テオは強固な意志をもち、思いやりに満
ちており、自分と同じような価値観を持っている人物だと考
えていること。

設問は、裏面に続きます。

問八 筆者にとって、「画廊を三〇年続けてきた意味」(——線部)とは、どのようなものですか。本文全体の内容を踏まえて、一〇〇字以上一二〇字以内で答えなさい。

- 下書き用（※これは解答用紙ではありません）

[illegible]

問九 本文の内容・構成・表現に関する説明として適当なものを

次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文末の「です」「ます」は、筆者からギャラリー島田とつ

の文章を引用している。

なさい。

- ナカ
(ば)

二

次の文章は、複数の作家による『捨てる』という題の作品集に収録されている福田和代「捨ててもらっていいですか?」の一節です。朱里^{あかり}たちの家族が、戦争に行ったことがある亡き祖父の遺品整理をしていた際^{さい}、容器の中から軍の拳銃^{けんじゅう}が見つかった後に続く場面です。これを読んで、後の設問に答えなさい。

「ちえつ、警察に持っていったやうのかあ」

注1 淳樹^{あつぎ}がスマホを受け取りながら、ひどく惜し^おそうに呟^{つぶや}いた。

「当たり前でしょ」

5 「だって、かつこいいじゃん。うちのじいちゃんが、あんなものを持ってたなんてさ」

朱里は苦笑いした。淳樹は淳樹なりに、祖父への愛情表現あるいはリスベクト^aの証^{あかし}として、あの銃^ほを欲しがっていたのかもしれない。

10 「いいから、もう帰ろうよ。秋好^{注2}が戻る前に帰りたいし、ママが待ってるし。それに、友達が遺品整理を手伝いたいって言ってるんだ。なんか、すぐ近くにいるんだって」

「げ、俺^{おれ}の友達にはイチヤモン^bつけたくせに、このうえ友達を呼ぶの?」

「秋好みたいのと違うから、大丈夫^{だいじょうぶ}。将来、あたしに自分の遺品整理^{たの}を頼^{たの}みたいんだって」

15 ^Aにんまりと笑う。電話でいきなりあんなことを言い出すから、こちらの反応も鈍^{にぶ}くなったのだ。ちゃんと顔を見て言えはいいのに、タケちゃん^{注3}ときたら。

20 淳樹が何かを察したらしく、ゲツと小さく呟^{つぶや}いて、駐車場から車を出した。

秋好は「なかったことにすればいい」と言っただけで、そんなわけにはいかない。煙草^{たばこ}の匂^{にお}いが染^しみついたシャツも、七十年も隠^{かく}し通した拳銃も、すべてひっくるめてうちの祖父が残したもの^Bなのだ。拳銃^{けんじゅう}だけを、なかつたことにはできないし、したくない。

25 自分ではなかなか捨てられないものって、たくさんある。だから、世の中にこれほど「上手なものの捨て方」や「片づけ」の方^B法論があふれているのだ。

捨てられないものが増えていく。そして人生が終わる時、最後まで自分では捨てられなかったものを、捨ててくれる人がいる。

30 捨てないことも、信頼^Cの証。

駅前のコインパーキングにまた車を停^とめて、マンションまでてくてく歩いて戻ってくると、祖父の部屋のベランダで、秋好が必死^{ぎしょうそ}の形相で手を振^ふっているのが見えた。

「おーい。ちゃんと持ってきたからな！ 早まるなよ！」

35 本当に通報されるかもしれないと、不安でいっぱいだったのだ

ろう。秋好の背後では、母が澄^Dました表情で口^Dに手を当てている。マンションのエントランスでは、健^{たける}が手^C持ち無沙汰^{ふさた}にうろうろしていた。こちらに気づくとぱっと明るい顔になり、「こっち！」と叫^{さけ}んで手を振り始めた。

40 朱里は淳樹の肩^{かた}をつつき、笑顔で駆けだした。

注1 淳樹：朱里の弟。

注2 秋好：淳樹の友達。銃を共通の趣味^{しゅみ}を持つ友人のもとへと戻ろうとしている。

注3 タケちゃん：朱里の恋人^{こいびと}。後に出てくる、「健」も同一人物。

二の設問

問一 ゴ~~~~線部 a～c の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a リスペクト

1 親愛

2 懐古

3 尊敬

4 感謝

b イチャモンつけた

1 無理矢理、理由をつけて文句を言った

2 理路整然と、他人の発言を論破した

3 難癖をつけて、気分を害した

4 嫌悪感を表し、批判を繰り返した

c 手持ち無沙汰に

1 することがわからずに

2 なにもできることがなくて

3 すべきことを終えて

4 緊張で何も手につかずに

問二 「にんまりと笑う」(——線部 A)とありますが、「朱里」はこの時、どのような気持ちだったと推測できますか。その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分の顔を見ずに遠回しな求婚をするタケちゃんを愛おしく思うとともに、求婚を受けたことを思い返して幸せを感じている。

2 電話で求婚したタケちゃんを心から愛する一方、その場で求婚に対する明確な返答が出来なかったことを恥ずかしく感じている。

3 求婚をしてくれたタケちゃんを家族に紹介することを恥ずかしく思いながらも、もうすぐタケちゃんと会えることを嬉しく感じている。

4 秋好と違って頼りになるタケちゃんにあこがれを抱いており、そんなタケちゃんからお願い事をしてもらえる自分を誇らしく感じている。

問三 朱里が「拳銃だけを、なかったことにはできないし、したくない」(——線部 B)と考えたのはなぜですか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 違法行為にあたる拳銃の所持を警察に届けないでいることは、何事にも筋を通す祖父の生き方に反すると思ったから。

2 処分に困る拳銃だけを見つかなかったことにするのは、遺族に対する祖父の配慮を無視するように思われるから。

3 シャツも拳銃も祖父の人生の一部だったので、拳銃だけを無視するのは祖父の人生を否定しているように思われたから。

4 拳銃もシャツも、祖父が残したのには意図があるはずなので、シャツだけを祖父の遺品として扱うのは祖父に失礼だから。

問四 「信頼の証」(——線部 C)とありますが、それはどういうことをいっているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 遺品には死者の大切な気持ちが込められているのだから、遺族は安易に遺品を捨てるのではなく、正しい処分をしなければならぬということ。

2 遺族が適切に扱ってくれるだろうと期待するからこそ、死者は自身にとって思い出深かったり、処分に困ったりする品物を残せるのだということ。

3 死者にとっても遺族にとっても、大切な思い出は共有されるべきものなのだから、遺族の判断を尊重するために死者は遺品を残すのだということ。

4 生前に遺族と長い時間を共有することによってのみつちかわれる家族を信じる気持ちによって、遺族は厄介だったり大切だったりする遺品を残せるのだということ。

設問は、裏面に続きます。

問五 「澄ました表情で口に手を当てている」(——線部D)という表現について、中学生のSさんたちは話し合いを通して考えることにしました。次に示す【話し合いの様子】を読んで、後の(i)・(ii)の設問に答えなさい。

【話し合いの様子】

Sさん 「澄ました」は、「平然としている」とか、「平気でいる」ことを表しているよね。一方、「口に手を当て」るのは、「笑っている」時の動作だね。どうしてこの二つのことが両立しているのだろうか？

Uくん この小説の他の箇所を見ると、「母が真っ青になっている」とか、「母のぼつてりと丸い指が強張っている」って記述もあるから、母はともじやないけど「平気」だとは思えないよね。

Mくん 「母」は拳銃を見て動揺した後、「捨てちゃおう」と思い切った決意をしたり、それから、「正気にかえった」り、「卒倒しそうに」なったりと、かなり感情の動きが大きく描かれているね。

Aさん ねえ、この場面で焦っているのは、「母」だけではないわ。「必死の形相」とか、「早まるなよ！」からは、「秋好」の尋常ではない焦りもうかがえるわ。

Sさん ここまでの「母」の人物像から、「澄ました表情で口に手を当てている」時、「母」は、(X)のだと推測できるね。

(i) (X) に当てはまる内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 秋好が戻ってきたことに安心して、笑顔の朱里たちに合わせて微笑もうとしている
- 2 動揺していた自分のことを棚に上げて、秋好が焦る様を可笑しく思っている
- 3 自分より焦る秋好を見て平静さを取り戻し、取り繕って笑っている
- 4 秋好の姿を見て動揺していた自分を恥ずかしく思い、照れ隠しをしている

(ii) 「口に手を当てる」のように、体の一部を表す語を使って、間接的に「わらう」ことを表現しているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 口を割る
- 2 目尻を下げる
- 3 小鼻をふくらます
- 4 眉根を寄せる

問六 本文の表現の説明として適当なものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 本文は朱里の一人称で描かれている。
- 2 本文で「拳銃」は、「非日常」、「男らしさ」の象徴として用いられている。
- 3 「ママ」や「タケちゃん」といった呼び方は朱里からの親しみを表しているが、「祖父」や「秋好」とは心の距離があることを表している。
- 4 19行目の「ゲツと小さく呟いて」は、淳樹の素直ではない性格を表している。
- 5 27行目の「あふれているのだ」に用いられる「のだ」は、気づきを表している。
- 6 最後の「笑顔で駆けだした」は、朱里が迷惑に感じていた祖父の拳銃をきれいに処理できた喜びを表している。

問七 本文の内容の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 処理に困る遺品を家族がどうするべきなのかという現代社会の問題を、ありありと描いている。
- 2 遺品に込められた死者の思いを尊重することの大切さを、拳銃の処分を題材として重厚に描いている。
- 3 遺品の処分を巡って、家族との絆が深まる様を、それぞれの心情に沿って感動的に描いている。
- 4 近しい人を信じられることの幸せを、祖父の遺品である拳銃を通じてユーモラスに描いている。



名 前	
-----	--

—

(※の欄には、何も記入してはいけません)

(※の欄には、何も記入してはいけません)

